

高大連携講座「結びつく世界をどう学ぶか？Ⅱ

－16～17世紀のユーラシア－」報告

報告者：中田稔・本田六朗・矢景裕子

高大連携講座は歴史分科会主催の世界史講習会で、高校生・高校教員・大学教員が一堂に会し、高校生への授業を通し相互に研修を行うことが特長である。昨年度より「結びつく世界をどう学ぶか？」と題し、ヨーロッパやアジアのように地域を限らず、広くユーラシアというステージを念頭に地域相互の結びつきを探ることとなった。今回は「16～17世紀」を扱い、鎌倉学園高校を会場に多くの高校生や高校・大学教員の参加を得て開催された。

1日目 8月8日(火)「16～17世紀のユーラシア東部」

中田 稔(大磯高校)

はじめに

事前の打ち合わせは、3日間の(ユーラシア東部/中部/西部)各ステージの範囲を確認することから始まった。「東部」を扱う初日は、中田がその東南部(中原以南の中国～朝鮮～日本～台湾～東南アジア)、東京大学の杉山清彦先生は西北部(中原～中国東北部～モンゴル・チベット・新疆～ロシア)を分担することとなったが、当日は中田が史料を前面に出しすぎたこともあり、杉山先生はユーラシア東部全体を視野におきつつ話を進められた。

高校教員による授業

授業者：中田 稔(大磯高校)

今年度から授業が行われている世界史探究や日本史探究も、歴史総合同様問いをたて資料(コ史料)を用いる探究学習がその核心である。

主な参加者が1・2年生であることを考慮し、中田は基礎知識として伝統的「華夷秩序」を解説(中華=漢民族であった時期はむしろ例外で、明はその構築をめざしていたことを強調)した上、年代順に並べた4つの史料を柱に、2世紀わたるこの地域の東南部を通観しようと試みた。まず、16世紀後半における明朝周縁の倭寇の状況を「鄭若曾『籌海図篇』(1562。以下、A)」・「鄭曉『今言』(1566。以下、B)」から説明した。Aは後期倭寇の首領の一人・王直が拠った五島列島を大きく描いた日本地図や倭寇の侵入路の図解を含む日本研究書で、Bは明朝官僚がいわゆる北虜南倭の実体を述べた上申書である(一部教科書に掲載)。次に、壬辰戦争(豊臣秀吉による朝鮮出兵の新たな呼称)後の朝鮮社会を「己酉式年蔚山府戸籍大帳(1609。以下、C)」から垣間見た。Cは朝鮮東南部に位置する蔚山で壬辰戦争終結11年後につくられた戸籍で、「降倭(朝鮮に投降した倭人)」や「向化(朝鮮に帰化していた女真人)」の戸が散見される。17世紀前半では、明清交替期の台湾・朝鮮・日本の状況を「ヘンドリック・ハメル『朝鮮幽囚記』(1667。以下、D)」中の3つの場面から追った。Dは1653年にオランダ統治下の台湾から朝鮮の済州島に漂着し、朝鮮に10数年滞在したのち長崎に送られ、母国への帰国を成し遂げたオランダ東インド会社社員の見聞記である。

地図(A)／官人の上申書(B)／戸籍台帳(C)／漂流民の見聞記(D)と、性格の異なる4史料を時系列に並べ、明→朝鮮→台湾・日本と地域も移しながら通観する試みだったが、生徒の評価は割れた。興味を示す生徒がいる一方で難解に感じる生徒もいたようだ。

大学教員による授業

授業者：杉山清彦（東京大学）

杉山先生は16～17世紀のユーラシア東部を一括し、3つの主題 — ①ロシアという新たなプレーヤーの登場、②チベット仏教の拡大による新しい地域的結びつきの実現、③互市という通商ルール拡大による地域間の結びつき方の変化 — から説明し、①では「ネルチンスク条約（1689。抜粋。以下、X）」、②では『アルタン＝ハーン伝』（17世紀初。伝記。以下、Y）、③ではYおよび『聖祖実録』（康熙帝の年代記。以下、Z）を史料として用いた。

講義の内容は構造化され、視点も深化され、かつ明快であった。Xは満洲文・ロシア文・ラテン文で記され（漢字では記されず）、旗人（満洲人）・ロシア人・通訳文書を作成したイエズス会士が条約に関わり漢人の科挙官僚は関わりがなかったことを押さえ、アルタン＝ハーンとダライ＝ラマの結びつきを示すYによってチベット仏教の急速なモンゴルへの普及と（漢字・儒教世界に比肩しうる）チベット仏教世界が確立されたことを指摘し、さらに明初から清初以降にいたる通交管理体制の変化 — 「互市」貿易の比重の拡大 — がYおよびZから導き出された。ユーラシア東部における地域相互の結びつきの変化・結びつき方の変化を押さえたうえで、18世紀以降から現代にいたるこの地域の原形が16～17世紀に形づくられたという結論であったが、論証の過程で話はそれ以上に深まり、広がった。

①では「対等」なネルチンスク条約の底流には、清露双方にモンゴル国家を継承する意識が垣間見られ、②のチベット仏教世界の確立は、西方キリスト教世界の宗教改革（カトリックとプロテスタントの分裂）・東方キリスト教世界（正教）の一国主義化に比肩する変化として把握でき、③では地域相互の結びつき方が変わる過程でアルタン＝ハーン、豊臣秀吉、ヌルハチそして鄭成功と、ユーラシア東部のさまざまな権力のぶつかり合いがあったことを指摘された。いずれもユーラシアというステージゆえに指摘できる事柄であった。

研究協議

生徒との質疑は史料・用語に対する確認からはじまり、今日的関心からウイグル問題の把握についての質問も出された。最後は「主体的に」学ぶことの意味が話題となり、歴史総合のメソッドが世界史探究／日本史探究につながることを実感した。個人的には、自分が授業で提示した4史料が「つながった」「つながりが分からなかった」と感想が割れ、授業構成・メインクエスチョンおよび史料に対する吟味が十分ではなかったことを痛感した。

教員対象の協議は、提示された内容・史料に関する学究レベルでの提起や質疑から始まった。自分の視野はどうしても東アジア史になりがちで、中国東北部からモンゴル、チベット、ウイグルと、ユーラシア東部の視点で縦横な質疑に応える杉山先生の見識の深さに感銘を受けるばかりであった。会場からは、中田の授業が「分からなかった」理由として、日本史をあまり絡めなかったことを指摘された。歴史総合の延長線上にある世界史探究は、日本列島を含むユーラシア東部を扱うのであれば、各地域とつながる限りの日本史を視野におくべきで、特にこの時期は東南アジアとのつながりも描けたであろうということであった。

おわりに

歴史学は史料に基づき、高校の歴史科目における探究学習は資料（コ史料）を活用する。構成に工夫の余地は大きかったが、資料（コ史料）を前面に出す授業を行ったことで、歴史を担当する教員の醍醐味は、生徒を資料（コ史料）に誘う案内人の役割を担うことだと考えるようになった。今回の貴重な経験を、歴史の授業におけるコンテンツ — 生徒の変容をうながす触媒／歴史的思考のための教材資料（コ史料） — について広く考える契機としたい。

2日目 8月9日(水) 「16～17世紀のユーラシア中央部」 本田六朗(横浜緑園高校)

はじめに

16～17世紀のユーラシア中央部と聞けば、ムガル・サファヴィー・オスマンという“おなじみのイスラーム3国”が思い浮かぶだろう。しかし、日頃の授業では「それらの国々が相互に、もしくは他地域とどのように繋がり、関わり合っているか」ということについて、じっくりと教え、考える時間的余裕はあまりないのではないかと。

当日、高校教員の授業で本田は基本的な用語の確認に加え、文字資料の読み解きを試みた。その後、東京都立大学の前田弘毅先生から最新の研究内容についてご教授いただき、ユーラシア中央部の有機的な結びつきを考えるための重要な示唆をいただいた。

高校教員による授業

授業者：本田六朗(横浜緑園高校)

開始15分程度で基本的な内容を確認した後、ワークシートに取り組んだ。その内容は3点 — ①1643年にパリの新教徒ユグノーの宝石商の家に生まれ、生涯に二度東方への大旅行を果たした商人ジャン＝シャルダンの『ペルシア紀行』および羽田正「シャルダンの見た東方の三つの帝国」(『岩波講座世界歴史13』所収のコラム)を取り上げ、ムガル帝国・サファヴィー帝国・オスマン帝国の当時の様子およびその関連性について考えるもの。②阿部克彦「イランから日本へ渡った染織品」(『岩波講座世界歴史13』所収のコラム)を取り上げ、豊臣秀吉の鳥獣文様陣羽織がどこで生産され、何を媒介に日本へもたらされたのかを考え、そのことを通して16～17世紀ごろのユーラシア中央部のネットワークについて考えるもの。③前田弘毅著『アッバース1世』(山川世界史リブレット人47)を取り上げ、サファヴィー帝国の支配体制および首都イスファハーンの繁栄の実態について考察するもの — であった。これらの資料を読み取るワークシートに取り組み、当時のユーラシア中央部について具体的なイメージを深めることが授業の眼目であった。

生徒が答えたアンケートでは「イスファハーンの実態に驚いた」「ユーラシア中央部の各国の差異を少し理解できた」「日本史とユーラシア中央部の繋がりを実感した」のような反応が見られた。いずれも資料を丹念に読み込んでいる形跡が伺え、資料活用の意義を実感した。一方、この時代のユーラシア中央部に関する資料は非常にアクセスがしづらく、どのように資料を収集するかは難題であると思う。

大学教員による授業

授業者：前田弘毅(東京都立大学)

前田先生は主にサファヴィー帝国とオスマン帝国の事例を取り上げて授業をされた。高等学校の世界史の教科書・資料集ではまずお目にかかれない様々な写真・グラフ・データが紹介され、生徒にとっても教員にとっても大変刺激的であった。先生はグルジア語やペルシア語が堪能で、カフカス地方の説明ではグルジア語について、イスファハーンの説明ではペルシア語について、現地の言葉を紹介しながら解説された。

先生の授業からの学びは、次の三点に集約できる。

まず、「歴史学習を、現代の理解にどう役立てるか」ということである。オスマン帝国とサファヴィー帝国の境界は16世紀半ばからほぼ変わっていないこと、この時代に“シーア派のイラン”という現代のイランにつながる地域の個性が顕在化すること、16～17世紀の政治秩序が現在に至るまで連続していること等の事例を挙げ、現在の世界を歴史的にとらえることの大切さを説かれた。

次に、「歴史の見方の変化」ないしは「歴史の書き換え」について繰り返し述べられていたことである。例えば、オスマン・トルコ帝国をめぐる正閏説（“正”は正統、“閏”は異端の意）というものが紹介されていた。オスマン・トルコ帝国は、17世紀以降ヨーロッパに押されて衰退したと捉えれば“閏”であるが、17世紀の江戸幕府のような内向充実期と捉えれば“正”になるというように、歴史事象の評価は見る立場によって異なる。イエニチェリはトルコ人にとってはオスマン・トルコ帝国衰退の一因となった“閏”であるが、トルコ人以外の民族からは別の見方をされるであろう。さらに、アッバース1世はイランという国の視点からは英雄であるが、現在のジョージアにとっては“強く呪われる存在”であるという。前田先生はこれ以外にも様々な例を引き合いに、過去を捉えることの楽しさと難しさを興味深く述べられた。

最後に、「移動する人々」をめぐる資料の面白さである。授業ではテレサとマーニーという二人の女性が紹介された。テレサは北コーカサスのチェルケス人で、イギリスの旧教派貴族と結婚し、夫はアッバース1世に仕えサファヴィー朝の使節としてヨーロッパに派遣された人物である。資料からは、当時のエリザベス女王やイギリス国教会等との繋がりをも見ることができる。マーニーはイラク出身でキリスト教徒のアッシリア人。ローマの大貴族であった夫は対オスマン帝国包囲網の形成に尽力し、夫婦はゴアで元和の大殉教を祝福する鐘の音を聞いたという。ローマ・カトリック教会の戦略から江戸幕府の外交政策までを結びつけて学習できる教材ではないだろうか。

冒頭で述べたように、この時代・地域について日常の授業で深く掘り下げるのはなかなか難しく、その原因として資料へのアクセスの難しさなどが挙げられるが、前田先生の授業には、魅力的な授業を作り上げるためのヒントが散りばめられ、奥深い内容ながら非常にわかりやすく、楽しい授業であった。

研究協議

教員間の協議で盛り上がった話題の一つに、アルメニア人コミュニティがある。本田の授業において提示した資料でも、アルメニア人はこの時代ユーラシア大陸の至るところに商業ネットワークを持っており、例えば豊臣秀吉が所蔵したと言われる鳥獣文様陣羽織は、このアルメニア人のネットワークおよび南蛮貿易を通じて日本にもたらされたものだともいわれていることにふれている。近代以降もラッフルズホテルを建てたサーキーズ兄弟、日産を買収しようとしたカーコリアンなど、歴史の端々にアルメニア人コミュニティは現れるのだ。

このことに関連して、前田先生がおっしゃった「近世の特徴は“線を引く”ということです。」という言葉が強く印象に残った。例えば「国民国家」は国家と民族・言語・宗教等をワンセットで捉える概念であるが、前田先生は「例えばイランでは、一民族・一国家・一宗教という理想は該当しない」という。さらに「タブリーズの人々はトルコ語を喋るが、自認はイラン人」であり、「イラン人はあくまで文化的概念であり、単純に人種・民族で括れるものではない」という。近世以降は、国家にまつわるあらゆる概念が線引きされていった。しかし、“線を引く”ことによって単純化することで却って見えにくくなる事象が存在する。その線引きにどのような背景があったのかを考えることは、この地域の近世を考える上で、非常に重要な意味を持つといえよう。

近世以前の歴史に対する正しい理解なしに、近世以降の歴史に対する正しい理解は得られない。今回の講座を担当したことで、このように強く思い至った次第である。

3日目 8月10日(木)「16~17世紀のユーラシア西部」

矢景裕子(神戸大学附属中等教育学校)

はじめに

3日目は高校教員側として矢景が、大学教員側として大阪大学の古谷大輔先生が担当した。ユーラシア西部とはどこなのか、それはどのような意味を持つ区切りなのか。「西アジア世界」や「ヨーロッパ世界」といった世界史教科書でなじみのある区切りではなく、地中海世界・大西洋世界・北海バルト海世界・黒海世界を有機的に結びつけ、ヨーロッパからコーカサス、北アフリカ地域までを包括する大きな地域のつながりを認識するのは、生徒はもちろん高校教員にとっても容易ではない。今回、矢景は地中海地域を中心に、諸資料から地域の様相を大づかみに理解するグループワークを行い、古谷先生は「礫岩のような国家」論を中心に、より広範囲かつ具体的なネットワークのありかたを描く講義を展開した。

高校教員による授業

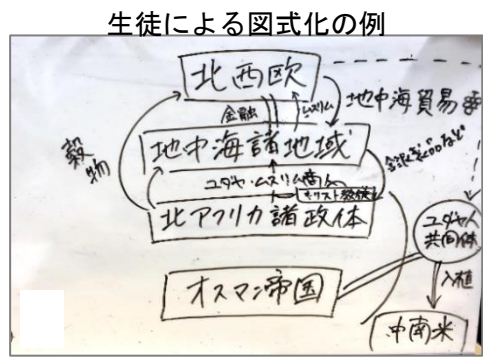
授業者: 矢景裕子(神戸大学附属中等教育学校)

矢景は今回の授業に2つの目標を設定した。1つは、生徒が「古谷世界史」を理解できるだけの、この地域に対する理解を獲得すること。もう1つは「高校教員側講座」の3日目として、前日まで(「東部」「中部」)を学んだうえでユーラシアのむすびつきを理解するための考え方を活用できるようになっているか、確認することである。そのためには生徒にアウトプットをしてもらうしかない。よって、今回の授業のねらいは「生徒が獲得した『16~17世紀のユーラシアネットワーク観』を、ユーラシア西部を舞台として確認すること」とした。

このねらいにもとづき、授業は「講義」と「グループワーク」2つの部分で構成した。講義は、ヨーロッパがその内外でどのようにつながっていたかを15分程度で概観した。王権が領域内(&外、または内外を行き来するもの)の様々なグループとの交渉による合意にもとづいていること、「交易の時代」への参入を果たして新大陸やアジアとつながり、また北アフリカを含むオスマン帝国とも変わらず密接な関係にあったことを説明した(授業開始5分前まで古谷先生に講義内容の誤りを指摘してもらっていたことは内緒である)。グループワークは4人1組になり、4つの資料を分担して読んだ上で「16~17世紀のユーラシア西部の結びつき」をホワイトボードに図式化する」取り組みを行った。

- 4つの資料
- 資料A 「ヴェネツィアの貿易」
 - 資料B 「近世ヨーロッパの商業活動」
 - 資料C 「イベリア半島のユダヤ人」
 - 資料D 「地中海のバルバリア海賊」

ほぼ初対面のメンバーのグループワークなので、授業者側も対話が成立するのか不安に思いつつの活動であったが、普段の教育の賜物か、生徒たちは資料から読み取ったことを自分の言葉で語り、他のメンバーと資料の持つ意味を話し合っ



て図式化を完成させた。ある班は、北西欧・地中海・北アフリカ・中南米の地域間を、ユダヤ・ムスリム商人がつなぐ図を作成した(右「図式化の例」)。「各地の政体」と「間をつなぐ人」が相互依存関係にある近世の特徴をよく示している。1日目・2日目に学んだ倭寇やアルメニア人商人などの役割の理解が、他地域の学習にも十分生かされている様子が見て取れた。

大学教員による授業

授業者：古谷大輔（大阪大学）

古谷先生の授業は、「歴史的ヨーロッパとは何か」を考えるとところから始まった。ヨーロッパとは、地中海文明・キリスト教・ゲルマン文化のハイブリッドであり、政治的には「レスプブリカ・クリスティアーナ」すなわち「みんなにとっての幸せの共同体」であったという。16～17世紀のヨーロッパにおいては、様々な困難の中で、各地域の人びとが自らの権利を守るために君主と交渉し、権利を「法」として保障させるように務めた結果、複数の地域からなる君主政／君主国が成立した地域であり、これらの国は人民や地域の権利の範囲が異なる「礫」の集合体としての、「礫岩のような国家」という概念が提示された。ユーラシア西部とは、イスラーム世界やロシア世界と、この「礫岩のような国家」が集まった「レスプブリカ・クリスティアーナ」が拮抗する世界であるという大きな枠組みが提示された。

講義は「礫岩のような国家」の構造へと続いていく。このような政体は、君主と人民の間で権利をめぐる交渉が行われ、君主がそれを法として保証する中世以来の仕組みが継続されている。そして、地域ごとの「レスプブリカ・クリスティアーナ」を実現するために、君主に執行権が集中する。そして、君主主権の突出を、有力者と人民が監視して抑制する「混合政体」の性質を持つ。このような政体においては、「帝国」や「皇帝」という言葉が示すものの性質が、講座1日目・2日目で学んだ各地域とは異なることにも言及された。

16～17世紀の「レスプブリカ・クリスティアーナ」に生きる人びとは、宗教迫害などの理由から、自らの能力を糧に地域内を移動した。より具体的な事例として、コイエット家が紹介された。もともと南ネーデルランドの家系であったのがスウェーデンに移り、東インド会社の社員として東南アジアや日本にまで来たという。ユーラシア全域を股にかけるそのダイナミックな移動に、生徒は（もちろん教員も）大いに関心を抱いたようだった。

講義の最後、古谷先生は「辞書や地図にある情報を鵜呑みにせず世界を考えてみること」の重要性を訴えた。英語で言う“empire”や“emperor”の訳語は「帝国」や「皇帝」で良いのだろうか。国境線で区切られた地図は、16～17世紀の「レスプブリカ・クリスティアーナ」を正確に映し出しているだろうか。高校での探究の結果として残る、このような「価値ある疑問」を深掘りすることが大学での研究であると生徒に伝え、講義は締めくくられた。

おわりに

矢景の授業に関しては、明らかに資料過多であり、まだまだ工夫の余地があった。この授業の反省を生かし、後日勤務校で同様の授業を行った際には、バルバリア海賊の資料に絞ってグループワークを行った。他の地域を担当された先生方の実践もふまえ、近世ユーラシア史のダイナミックなつながりを実感できるような授業づくりに努めたい。余談だが、矢景は大阪大学文学研究科出身で、古谷先生も参加されている大阪大学歴史教育研究会で歴史教育を学んだのち高校教員として採用された。今回は「シン・阪大史学の挑戦」の意味もこめて、古谷先生と組ませてほしいとお願いした。寛大にも要望に応じて下さった事務局の先生方、そして多くのご指導をいただいた古谷先生に心から感謝したい。

ユーラシアを大きく3つに分ける試みは、教科書に載っていない区分で生徒を混乱させるという意見があったものの、授業する教員自身が固定化された「ヨーロッパ史」「西アジア史」「東アジア史」などの枠を超えた視点を持たなければならない状況に追い込まれたことそのものに、大きな価値があった。レンズの倍率をどうするか、窓の中にどのような被写体を入れるかによって、見えてくる歴史は大きく変わることを実感した。もちろん生徒には相当な負担であっただろうが、最後まで前向きに粘り強く参加する姿勢には感服した。